

教養教育としての大学体育

—短期大学部における授業実践から—

Physical Education as Liberal Arts

— After teaching practice in junior college —

荒牧 亜衣

(Ai ARAMAKI)

Key words : 教養教育、大学体育、生涯スポーツ、保健体育、短期大学部

I. はじめに

1987年に内閣直属の臨時教育審議会の最終答申を受けて大学審議会が設置され、1991年に行われた大学設置基準の大綱化により、4単位必修で行われた大学体育の存在根拠は実質的に喪失した。大学体育は、戦後の日本における青少年の身体的虚弱状態を受けて1949年に制度化されたものであったため、当時とは異なる状況にある現在の大学生の健康状態を考慮し、その必要性に関して検討がなされた上での結論であった。以降、正課体育、大学体育、一般体育といった枠組みとして位置づけられる体育学部以外におけるカリキュラムに組み込まれた体育の位置づけについて、さまざまな議論が繰り返されている。

森田は、現行の大学設置基準の教育課程の編成において、「(前略) 大学は学部等の専攻に係わる専門の学芸を教授するとともに、幅広く教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮しなければならない」と定められていることを受け、体育学などに係わる専修課程をもたない大学における体育科目、つまり一般体育は、主に「教養」、「総合的判断力」、「人間性の涵養」等を目的とする教育となり、大学体育を教養として位置づけることは自明である¹⁾と述べており、体育の位置づけに関する議論において、教養教育の可能性を追求していくことは必要不可欠であると主張している。大学体育は、大学教育における教養教育として、どのような形で貢献し、何を目指すべきなのだろうか。

短期大学部では2年という時間的制約に加え、目白大学短期大学部のように体育を専門とする専攻課程をもたない教育機関においては、これまで体育という領域に対して深く関心をもってこなかった女子学生を対象とした環境のなかで授業を進めていくことになる。短期大学の体育は、大学教育における教養として、何をねらいとして、どのような可能性のもとで展開するのか。このような視点をもって検討していくことは、大学体育の教養教育における位置づけや役割を議論していく上で重要であると考えている。

そこで本研究では、まず教養教育としての大学体育の意義について先行研究から検討を行う。これまでなされてきた議論を整理することによって、教養教育として大学体育の授業実践の可能性について明らかにしたい。次に、本学における保健体育の位置づけについて考察を行

う。現在、本学短期大学部で「保健体育」は教養科目の必修単位として設置されている。本学4年制大学では、基礎教育科目におけるスポーツ・健康科目としての設置が維持されており、基礎教育科目の教養科目の枠組みとは位置づけが異なっている。そこで教養科目として位置づけられている短期大学部の授業実践から、この科目に求められている内容について分析する。1990年代に新興した大学改革の流れの中で、改組や学科の新設等を繰り返した本学における体育授業の位置づけに関する変遷、実施内容をたどりながら、この授業に求められてきた目的や内容を明らかにすることにより、教養教育としての短期大学部における大学体育の役割や可能性について考察することを目的とした。本発表においては、教養教育における教養の定義をあらかじめ設定するのではなく、先行研究の成果や本学における取り組みから教養科目としての保健体育のあり方について検討していくこととした。

Ⅱ. 教養教育としての大学体育の意義

1. 先行研究の検討

教養教育としての大学体育に関する研究はこれまで数多く報告されている。日本体育学会体育原理専門分科会（現体育哲学専門分科会）においても、2001年、2002年に「大学体育の思想」がシンポジウムのテーマとして取り上げられている。²⁾ 大学設置基準の大綱化までに繰り返された大学体育の必要性に関する批判への議論は、教養教育としての大学体育に関してさまざまな方向性を提示している。

教養教育としての大学体育の位置づけに関して、徳山は、「健康・体力づくり」、「生涯スポーツへの動機付けとしての文化的価値」、「運動技術の習得」、「身体に関する知的啓蒙」などの目標を掲げることは、体育の独自性を主張し、他領域からはわかりやすくなるが、独自性を主張するだけでは普遍的教育目標を曖昧にさせ、教養教育の軽視を導き、ひいてはそれが大学体育の縮小につながると指摘している。³⁾ 徳山は、身体を位置づけた「知」という視点から大学体育の実践を考えること提案し、身体性を教育の基幹として考える体育教育を超え、社会や教育全体に向けたメッセージになると述べている。体育の独自性に固執するのではなく、教養教育としてふさわしい授業を提供するという考え方は、大学体育の必要性に関する議論を行う上でも非常に重要であるといえる。

また、林は、大学体育一特に共通必修的な部分—の思想として重要なことは、体育科目の役割を単なる予備的・前提的学科としての位置づけに留めるのではなく、大学教育が究極的に求めることの関わりにおいて設定し直すことである⁴⁾と述べ、“理論と実践の関係を検証する方法を学ぶ”ことや“個人の行動が他者や環境に与えるインパクトを把握する想像力を育む”といった総合判断力の育成を目標に考えた授業を提案している。

このような考え方をうけて森田は、大学体育を、「健康」「初年次教育」「友人作り」などの大学教育の前提・周辺ではなく、専門性を発揮できる研究と関連付けながら、大学教育の中心に向かっていくべきだと主張し⁵⁾、身体活動を伴う実技からアカデミックな教養の習得を目指し

た体育・スポーツの授業⁶⁾や学生が主体となって運営する授業⁷⁾を提案している。これまで「健康・体力づくり」や「生涯スポーツへの動機付け」といった学習目標が設定されてきた大学体育の授業実践において、徳山、林、森田の指摘は重要であり、教養教育としての大学体育の一つの可能性を提示しているといえるだろう。

2. 本学における「保健体育」の授業実践

目白大学短期大学部は、「目白学園女子短期大学部」として1963年に開学し、1994年の4年制大学「目白大学」の設置を受けて、2000年に目白大学短期大学部と校名を変更した。1990年代から新興した大学改革の流れを受けて、新学科の設置、改組を繰り返しながら現在は、製菓学科、生活科学科の2学科で構成されている。次年度には、ビジネス社会学科が新設予定である。

度重なる改組の中で、基礎教育科目のあり方についても検討が行われ、「保健体育」の位置づけについても議論がなされてきた。

本学短期大学部において、「保健体育」は、大学設置基準の大綱化以降、1992年までは「保健体育科目」としての開講を維持し、「体育実技」として、各種スポーツ実践を展開していた。また、授業の目標や実施内容についても各担当教員独自のものとなっており、当時の講義要覧においては、共通の授業目標等は記載されていなかった。1993年に基礎教育科目の中に位置づけられると、「体育演習」「体育理論」という科目名によって開講された。「体育演習」は1年生を対象に通年の2単位で開講されているもので、講義、校外スポーツ実習、身体表現系スポーツ、球技・軽スポーツが実施され、授業目標は下記のようなものであった。

- 1) これまでに学習してきたスポーツ、健康に関する知識と経験を再確認する。
- 2) 自らの健康や身体活動についての意識を促す。
- 3) グループ活動を通して、協同する工夫と喜びを体験するとともに、本学の学生としての意識を高める。
- 4) 文化としてのスポーツ及びスポーツの楽しさを学習する。⁸⁾

具体的な授業内容としては、校外スポーツ実習としてボーリングが実施されており、当時の社会的ブームが授業内容に反映されていることがわかる。また、女子だけの2年制短大であったことから身体表現系の科目を重視している傾向が見られ、創作ダンス、リズム運動、新体操、チアリーディングといった特色ある科目がそれぞれ授業において、担当教員の専門に応じて実施されていた。1996年には、講義形式として開講されていた「体育理論」が「生涯スポーツ論」「健康科学論」という授業に変更され、新たに「スポーツ演習Ⅰ」「スポーツ演習Ⅱ」としてゴルフ、ビリヤードの校外実習が追加されている。

以降、同様のカリキュラムが継続して実施されるが、1999年においては、それまで2単位の

授業として開講されていた「体育演習」が、「体育演習Ⅰ」「体育演習Ⅱ」という1単位ずつの授業として開講された。それぞれのねらいは次のように記載されている。

体育演習Ⅰは、身体運動及び健康づくりのための基礎理論の学習、学外におけるスポーツ実習を通して、身体運動・健康に関する意識を高め、それらの観点から日常生活行動の見直し・改善を自律的に図ることのできる能力と態度を身につけることをねらいとします。⁹⁾

体育演習Ⅱは、身体運動の実践とそのための理論学習を通して、からだを動かすことの楽しさ・喜びを理解すると同時に、健康について考える習慣を定着させ、さらに社会生活における基本的行動様式の形成・再構築を目的とします。¹⁰⁾

「スポーツ、身体運動の実践」、「健康的な行動様式の形成」といった授業の中心的なねらいに変更はみられないが、「これまでに学習してきたスポーツ、健康に関する知識と経験を再確認する。」という記述は完全に削除され、大綱化以前の「保健体育科目」の位置づけに見られていた高校までの学習内容の延長とは異なる視点の強調がうかがえる。この授業は、2000年に「スポーツ演習Ⅰ」「スポーツ演習Ⅱ」という授業に名称変更されている。実施内容に依然として大きな変更はなく、授業のねらいは、「健康に関する日常生活の見直し・改善」「基本的行動様式の形成」という学生の心身の健康に主眼を置くことが維持されていた。

さらに2001年には「健康とスポーツ」「フィットネス」「チアリーディング」の3種類の実技授業がそれぞれ1単位、「健康科学論」の講義が2単位で開講された。

短期大学部に子ども学科が新設された2003年には、大幅なカリキュラム変更が行われた。共通科目として講義形式の「保健体育Ⅰ」、実技形式の「保健体育Ⅱ」に加え、「エンジョイ・スポーツ」「リズムにのって」という特色ある名称の授業が開講された。「保健体育」という名称は、保育士・幼稚園教諭の資格認定に伴う変更であった。「エンジョイ・スポーツ」では、各種スポーツ種目の実践が授業内容として展開されていた。「エンジョイ・スポーツ」「リズムにのって」の授業のねらいは、それぞれ次の通りであった。

健康な心身を維持していくためには、適度な運動がかかせません。気軽に楽しめる球技スポーツ（主にバドミントン・卓球）を取り上げ、自発的な取り組みによる知識・技術の習得を通じて、より充実したスポーツ体験を目指します。¹¹⁾

リズムは芸術、文化、生活などあらゆるところに浸透し、その本質的な意味は古くからさまざまな解釈がなされてきた。人間がリズムに没入して踊るのは、人間の本能的な欲求に根ざしているからであり、そこにダンスの根源的価値が内在している。生体から湧き出るリズムなどに注目し、リズムによる心の共鳴、リズムによる身体の開放をテーマとする。¹²⁾

「エンジョイ・スポーツ」や「リズムにのって」という特色ある名称の授業が展開された背景には当時の学生たちの状況が強く影響していたようである。いわゆる「ガン黒、茶髪」といわれた女子学生を多く受け入れていた短期大学部において、学生たちにかに学校にきてもらうか、また学校にこさせるのかということが大きな問題となっていた。また、大学設置基準の大綱化以降、体育授業の存続に関する議論は本学においても例外ではなく、学内の基礎教育委員会等でも検討されていた。その際、体育授業に期待されたことは、学校にくるという動機付けにつながるような授業の展開はもちろんのこと、学生に健康的な生活習慣に関心を抱かせること、そして心の健康につながるような授業を実施することであった。このような経緯から、基礎教育科目における「自己表現科目」として、「エンジョイ・スポーツ」や「リズムにのって」という2つの授業が開講された。現在の短期大学部の「保健体育」は基礎教育科目の「教養科目」として設置されているが、当時これらの名称でおこなわれていた一般体育の授業は、「自己表現科目」として設置されていた。その他の自己表現科目としては、「アート表現」「音楽表現」「エンジョイ・クッキング」「手話入門」などが開講されていた。体育の授業においては、学生たちに健康な身体や健康的な生活習慣に関心を抱かせ、心の健康に配慮した授業を目指し、スポーツ実践やリズムを通じた活動により、自身や他者への身体への気づきを促そうという試みが行われていた。特に、「リズムにのって」の授業では、和太鼓やカホンといった教具を用いて、個人や相互関係の中で身体に刻まれるリズムについて感じるという活動も行っていた。

その後、学科の改組に伴い、「自己表現科目」という枠組みがなくなったため、これらの授業は閉講した。

2007年から現在のカリキュラムである「保健体育」が設置され、卒業必修単位（1単位）として教養科目に位置づけられている。今年度は、学科やコースを指定した履修方式をとっており、学生は、指定されたクラスで16回の授業を受講する。担当教員は2名であり、それぞれシラバスを作成し授業を行っているが、評価方法を統一し、授業のねらいについても事前に打ち合わせを行っている。また、各種スポーツ種目の実践に加え、16回の授業のうち2回を講義あて、飲酒と喫煙に関するテーマを取り扱うことを確認した。

今年度私が計画したシラバスと授業内容は、表1に示す通りである。学生とのコミュニケーションや施設状況により、開講途中に計画を変更しながら16回の授業を実施した。

表1 平成21年度「保健体育」シラバスと授業実施内容

	シラバス	主な実施内容
第1回	ガイダンス	授業の説明など
第2回	バドミントン①	歴史、ルール説明
第3回	バドミントン②	ダブルスゲーム
第4回	バドミントン③	ダブルスゲーム
第5回	講義	講義：スポーツと生涯にわたる健康
第6回	ソフトバレーボール①	歴史、ルール説明
第7回	ソフトバレーボール②	ゲーム
第8回	ソフトバレーボール③	ゲーム
第9回	ニュースポーツ	ユニホック
第10回	講義	バスケットボール
第11回	ウォーキング	ドッチボールとヨガ
第12回	ゲームとヨガ	各種縄跳びとヨガ
第13回	ゲームとヨガ	講義：スポーツ文化について考える
第14回	卓球①	歴史、ルール説明
第15回	卓球②	ダブルスゲーム
第16回	卓球③	ダブルスゲーム

設定した授業のねらいは、次の通りである。

平均寿命の伸長、余暇時間の拡大に伴い、スポーツの意義や必要性は高まっています。スポーツを多角的にとらえることにより、それぞれのライフステージに応じて、いろいろな楽しみ方ができることを理解し、豊かなスポーツライフ、豊かなスポーツ文化を創出できる能力を身につけましょう。

また、この授業では、健康について学習したり、各種スポーツを実践したりすることを通じて、それに関わる多様なライフスタイルの可能性を理解し、生涯にわたる健康保持・増進のための基本的な知識及び実践能力を身につけることを目指しています。¹³⁾

教養科目としての位置づけを意識して、具体的に展開したことは、まず、さまざまな種目を経験してもらうことである。一種目を集中的に学習して、技術習得やスキルアップを目指すのではなく、複数の種目を実施することで、自分自身や他者とのかかわりをいろいろな形で経験してもらうことをねらいとした。また各種目の導入段階においては、ルールの変遷や発展過程といった歴史的な背景を簡単に説明し、スポーツを多角的にとらえる視点を提供した。また、個人種目ではなく、2人以上で活動を行うよう授業内容を設定し、特定のグループだけの活動とならないよう配慮した。さらに、学習記録についても積極的に活用し、自身の課題設定だけでなく、ペアやチームの取り組みに関する評価を学生同士によって行ってもらった。

以上のようなねらいをもって、私は今年度から授業を初めて担当したが、実際に学生と向き合う中で、表2挙げる4項目に関して、発見や難しさを感じた。

表2 授業場面から

授業場面から

- ニュースポーツの楽しさ
→既成のスポーツに対するイメージを超えて
- 学生主体の授業に向けて
→ゲーム内容の提案、学生の興味・関心
- グルーピングの難しさ
→少人数、出席者数、学生同士のコミュニケーション
- 授業に対する動機付け
→自分自身の身体を知り、動かすということ
→チームやペアで活動するという

まず、第一にニュースポーツの魅力について述べたい。本授業では、ニュースポーツの紹介というねらいによって、一回のみであったが、ユニホックを実施した。授業前の興味関心度は低かったが、授業後の反応はその他のスポーツ種目ではなかったもので、それぞれの学生の中でこれまでにできあがったスポーツに対するイメージを超えて、身体を動かす、チームで活動するということに対して、楽しさを感じてもらうことができた。ニュースポーツの特徴として、技能レベルにかかわらず、わかりやすく、親しみやすいという特徴が挙げられるが、この特徴が授業の成果に直接的に反映された結果であった。

第二に、学生主体の授業に向けた可能性の発見があった。本授業の後半部分において行ったゲームは、学生の興味関心に合わせて、内容を提案してもらい、方法も工夫してもらおうという活動を取り入れた。森田が学生主導の授業運営に関して、教養科目として課題形成能力が育成される可能性を示唆しているが¹⁴⁾、本学短期大学部においてもこのような授業形態が高等教育における教養教育の内容として有効であると考えられた。

第三、第四にグルーピングや授業に対する動機づけの難しさについてであるが、この点に関しては、授業者である筆者の教員としての力不足を痛感した部分であった。例えば、知らない人と組むということに対して強い抵抗を感じる学生、コミュニケーションがうまくとれない学生に対していらだつ学生、とにかく身体を動かしたくない学生など、授業の中で対応に悩んだり、実施内容を再検討したりすることも少なくなかった。

学生の学習記録やレポートからは、表3のような受講の感想が得られた。授業最終回に記入してもらった学習内容に関する記述からは、身体を動かすことやチームワークの大切さに関する内容が多かった。ニュースポーツやヨガといった高等学校までの体育授業ではなかなか実施されない種目を選択したことや、技能レベルを重視しない授業を行ったことから、「普通の体育」という言葉に象徴されるように、既成のイメージとは異なる感想を述べる学生も多かった。また、2人以上での活動を行うことに関しては、シラバス作成時から重視していた点であったが、「周りの人のことも考え行動(中略)スポーツは人間関係を円滑にする」という感想が得られたことは授業者にとって大きな収穫であった。

一方で、複数種目を実施したことに関しては、肯定的な感想も見られたが、「もっと1つのことを長くやりたい」という意見もあった。教養科目としての保健体育において、単独種目を実施すべきか、複数種目を実施すべきか、という点については議論の及ぶところである。今年度のカリキュラムにおいては「保健体育」は学科やコースを指定した履修方法を選択していたことも、このような複数種目を実施するシラバスを作成した背景にあったが、「課題解決能力」や「探究心」といった視点から体育の授業を考えると、種目の選択や授業形態について、再考していかねばならないだろう。

表3 学生のレポートより

学生のレポートより

●身体を動かすことやチームワークの大切さ

…普通の体育でやらないようなヨガやユニホックなどができてすごく楽しかった。(下線は筆者)

…今まで知らなかった各スポーツの歴史を知ったので、他のスポーツの歴史にも興味を持ちました。

…自分だけでなく、周りの人のことも考え行動しなくてはなりません。スポーツは人間関係を円滑にするものだと思います。(下線は筆者)

…やっとおもしろくなってきたところで終わってしまう(中略) もっと1つのことを長くやりたいと思った。(下線は筆者)

本学の「保健体育」は、基礎教育科目という大きな枠組みの中で科目名や履修方法の変更を繰り返しながら、その位置づけに関する検討が行われてきた。授業の中心的なねらいは、「健康や体力の保持増進」「生涯スポーツへの動機付け」あるいは、「社会性の涵養」といった体育の独自性を主張するものであり、このような学習目標は現行のカリキュラムにおいても重視されている。改組やカリキュラム変更の流れをたどっていくと、「共通科目」や「自己表現科目」という枠組みをへて、保健体育は必然的に「教養科目」という位置づけを得たことが推察される。保健体育が「教養科目」として位置づけられたことは、現行の大学設置基準における「幅広く教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮」という記述からも、その変更の流れが必然的であったといえる。しかしながら、本学短期大学部における教養科目としての保健体育について、議論の必要があることは自明である。今後は、本学における教養教育として保健体育のねらいについて再確認し、より充実した授業を目指したい。具体的には、自己表現科目として位置づけられていた授業内容から本学における教養教育について考察を行うこと、学生主体の授業展開について検討していくことを考えている。

Ⅲ. まとめ

ここまで、先行研究の検討から、教養教育としての大学体育の意義について先行研究から考察を行い、本学短期大学部における授業実践を報告した。本学の「保健体育」の授業実践に関しては、現在のところ「高校の学習内容の繰り返しになっている」、「アカデミズムにそぐわない」といった大学体育にこれまで向けられてきた批判の域を脱することはできていない部分があることは事実である。しかしながら、授業を受講する本学学生の現状を目の当たりにしたとき、その意義や必要性を感じずにはいられない。本学における教養教育としての「保健体育」は、「健康や体力の保持増進」「生涯スポーツへの動機付け」あるいは、「社会性の涵養」といった学習目標を中心に据えることで、その意義や必修科目としての可能性を保持しているからである。

今後は、このような視点をふまえて、本学に求められるアカデミックな教養の習得を目指した教養科目としての体育・スポーツの授業を提案していくことが課題である。短期大学部における学士力という視点から、教養とは何かについて考えていく必要もあるだろう。教養教育としての大学体育の位置づけについて検討する際には、各大学に求められている教養教育とは何かについて明らかにしておく必要がある。大学体育が教養教育として貢献していくためには、各大学がその大学に必要とされる「教養」について定義し、求められる役割や可能性について構想していくべきではないかと考えている。

【注】

- 1) 森田啓、林容一、引原有輝、谷合哲行（2008）大学体育は「健康を学習目標にすべきか：大学教育における体育の位置づけに関する考察、大学教育学会誌第30巻第2号、130頁。
- 2) シンポジウムの詳細に関しては、体育原理研究第32号、第33号に掲載されている。
- 3) 徳山郁夫（2001）ヒューマニティな身体感に根ざした教養教育—実技における展開—、体育原理研究第32号、83-86頁。
- 4) 林英彰（2002）総合的判断力育成の可能性を求めて、体育原理研究第33号、100頁。
- 5) 前掲書134頁。
- 6) 森田啓、林容一、谷合哲行（2007）スノーボードを用いた教養教育、大学教育学会誌第29巻第2号、145-150頁。
- 7) 森田啓（2007）教養教育としての大学体育の試み～学生が運営する授業～、体育・スポーツ哲学研究第29号第2巻、151-164頁。
- 8) 平成5年度授業計画（Syllabus）英語英文科、目白学園女子短期大学、236頁-248頁。
- 9) 平成11年度授業計画（Syllabus）英語英文科、目白学園女子短期大学、195頁。
- 10) 平成11年度授業計画（Syllabus）英語英文科、目白学園女子短期大学、213頁。
- 11) 平成15年講義要項、目白大学短期大学部、16頁。
- 12) 同上書、17頁。
- 13) http://www.mejiro.ac.jp/syllabus/2009tan/212554_2909_24.html 2009年9月21日
- 14) 森田啓、林容一、引原有輝、谷合哲行（2009）教養教育としての大学体育：サッカーを事例に、大学教育学会誌第31巻第1号、162-171頁。

【参考文献】

- 1) 関根正美、深澤浩洋（2003）討論のまとめ、体育原理研究第33号、113-114頁.
- 2) 杉山茂、浅見利雄、青島健太、山口香、中村好男「21世紀カレッジスポーツの展開：大学改革の現状と課題」社団法人大学体育連合（2003）大学体育第80号、51-76頁.
- 3) 森田啓之他（1996）本学の教養教育における「体育実技」の実践成果に関する検討—体育実技Ⅰについて—、兵庫教育大学第16巻第3分冊、57頁-69頁.
- 4) 萩原武久（2003）知を生かす大学体育：個性輝く大学づくりのために、筑波フォーラム（65）、76頁-81頁.
- 5) 茅野理子（2007）教養教育における体育実技の意義に関する考察、宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要第29号、421-430頁.
- 6) 篠田邦彦（1999）生きる力とスポーツの教育力、体育思想研究No.5、77-95頁.
- 7) 下田政博他（2008）大学生の健康関連体力向上に対する教養科目—スポーツ・健康科学実技—の役割と大学教育におけるその意義一、大学体育学第5号13頁-26頁.

本研究に取り組むにあたり資料収集にご協力いただいた本間玖美子先生、佐藤直子氏に感謝申し上げます。